

今月の視点

もう一つのカビた饅頭

～新型インフルエンザ等発生時の診療継続計画～

理事 前川 恭子

2016-17 年冬、中国での H7N9 鳥インフルエンザウイルス感染発症者が増えた。2015-16 年冬の倍以上の数である。CDC（アメリカ疾病予防管理センター）が H7N9 ワクチン準備に動き出した¹。治療経過中のノイラミニダーゼ耐性出現、限定的なヒト-ヒト感染の報告、致命率約 30% の高さ。もしやと思ったが、3 月後半から週あたりの患者報告数が減少してきた（図 1）。それでも H7N9 は、現在、新型インフルエンザに最もなりやすいウイルスと認識されている。

2013 年、国は「新型インフルエンザ等対策政府行動計画」を策定した。その中で想定されている新型インフルエンザの患者数は約 2500 万人、致命率は高く 2% である。検疫強化・予防接種・

抗インフルエンザ薬予防投与などにより、図 2 のように感染ピークを遅らせ、ピーク時患者数も減らす計画である。

新型インフルエンザ対策の予防接種には特定接種と住民接種がある。特定接種の主体は国、接種時期はプレパンデミック、接種される予定のワクチンはプレパンデミックワクチン、対象は住民の生活維持に必要な者である。住民接種の主体は市町、接種時期はパンデミック初期、対象はもちろん住民だが、ウイルスの病原性により接種優先順位が変わる。ワクチン流通管理はどちらの接種に関しても県が行う。接種するのはもちろんわれわれ医師である。どちらの予防接種も集団接種を前提としている。

新型インフルエンザの予防接種を担当する医師

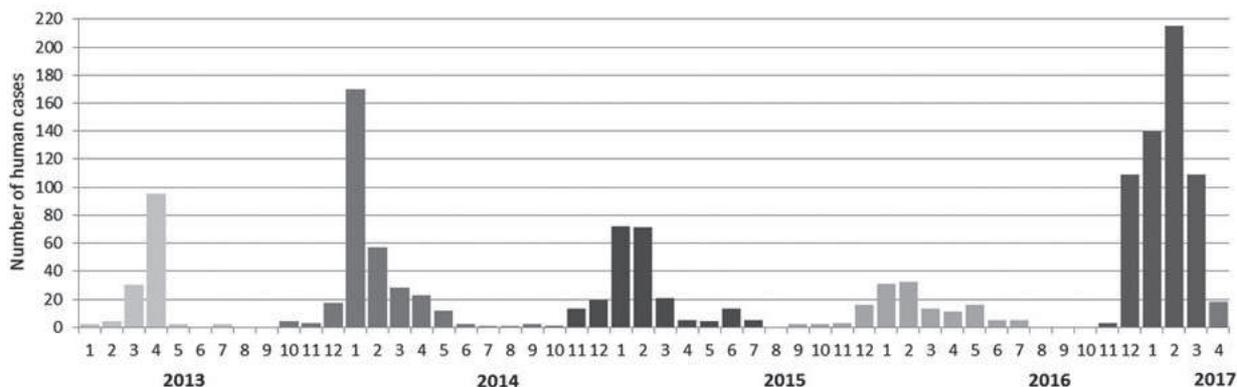


図 1 Food and Agriculture Organization of the United Nations より :Incidence of officially reported human cases by month, based on onset date as of 12 April 2017. Information provided corresponds to both high and low pathogenic H7N9 viruses.

の業務量は、図 3 のようになると予測する。パンデミック時には、破線のように発症者の診療が重なってくる。破線が右にずれるか左にずれるかは、ワクチンの効果とウイルスの病原性・感染力などで決まる。

約 100 年前の日本でのスペイン・インフルエンザ流行は 2 年にわたった。1918 年冬の「前流行」では罹患率が高く、致死率は 2% 弱、死亡数も多かった。1919 年秋から冬の「後流行」では、平均的な罹患率は低かったが、致死率は地域により 10～20% にもなった。「前流行」を逃れた郡部では「後流行」での罹患率・致死率が高く、「前流行」で発症者が多かった地域では「後流行」で

の罹患率が相対的に低かった。

「前流行」でインフルエンザを発症・回復した人が、翌年の「後流行」でどれだけ罹患・発症したか、調べた範囲では明らかな数値がない。が、軍の記録には、「前流行」で発症・回復した兵は「後流行」では発症せず、「前流行」後に入隊した新兵ばかりが「後流行」時に発症したとあるⁱⁱ。「前流行」で免疫を獲得した者が「後流行」時に発症しなかったと考えられている。

当時の「前流行」並の抗体産生を、現在のワクチンで実現できれば良い。しかし H7N9 ウイルスは抗原性が弱く、抗体を効果的に産生させるワクチンを作りにくいと言われている。

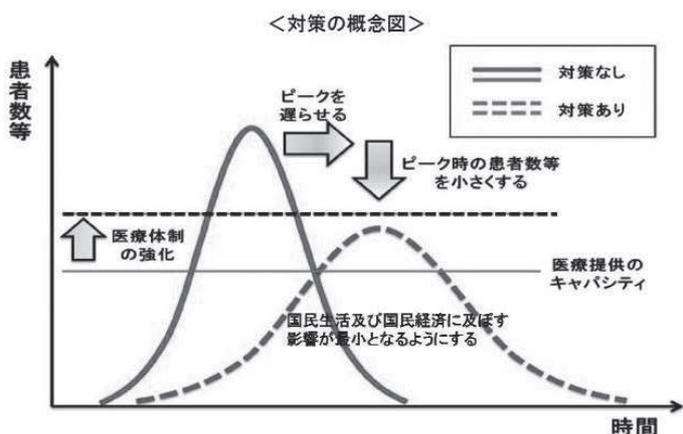


図 2 新型インフルエンザ等対策政府行動計画 2013/6/7 より

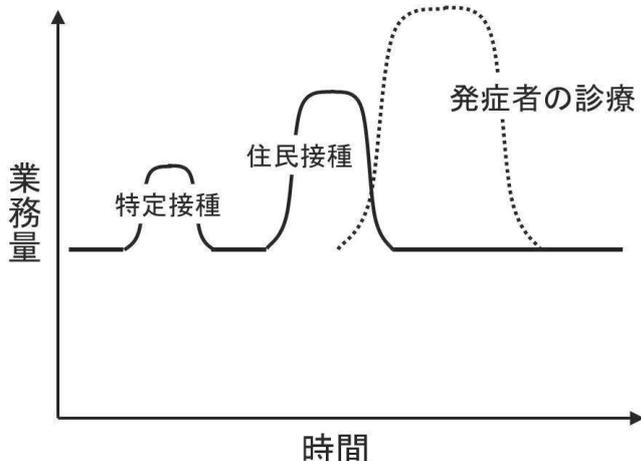


図 3 新型インフルエンザ流行時予測業務量

自治体や企業に業務継続計画を立案すべきとされている大規模災害には、地震、洪水、豪雪、火山噴火などがある。それら自然災害では、インフラが障害された状態で、孤立した地域で限りあるリソースを使い、被災者や被災現象に対応することが求められる。集中的な対応を要すると見込まれる期間は 2～4 週間である。

同じく業務継続計画立案対象となっている新型インフルエンザ流行時は、基本的にインフラは維持される。が、自治体機能・医療・福祉・物流に関するマンパワーが一時的に減少し、他の大規模災害よりもその減少が長期にわたる可能性がある。新型インフルエンザの流行期間は 8 週間、ピーク時の欠勤率 40% が予測されている。

ウイルスの病原性、プレパンデミックワクチンの効果により、医療機関の職員の欠勤率は変わり得る。医療機関の規模、担当科により、準備することも異なる。自院の職員が 6 割しか出勤できない状態で、住民接種に並行し発症者の診療を求められる状況もあり得る。

ほんの数年前、「新型インフルエンザ等発生時の診療継続計画」を作成された

先生方もいらっしゃるはずだ。鳥インフルエンザのヒト感染状況が、数年前とは変化していることを自覚しながらも、私はそれを作成したことをすっかり忘れていた。

そして今、同じように忘れていらっしゃる先生にも、そうでない先生にも、新型インフルエンザ発生時にどう動くかを改めてお考えいただきたい。最前線で動かれる先生方だからこそ、国や県や市町と異なる視点で、見えるものがおありだと考える。医療者として、雇用者として、個人として、一緒に働く人、ご自分にとって大切な人、そしてご自身を、どう守りながら業務を続けるのか、又は続けられないことを選ぶのか、お考えいただきたい。

NHK 大河ドラマでは、城主直虎が誕生した。イケメン井伊直親は既に殺されている。

直親は以前、次郎法師であった直虎に、名を変え身を隠し夫婦となることを提案した。先んじて、南溪和尚は次郎法師に饅頭の謎掛けをした。

二人の大臣の優劣をつけるため、王はそれぞれに二つの饅頭を与えたという。どちらも饅頭一つを食し、一人は残りの饅頭を空腹の者に与えた。もう一人は残りの饅頭を大切に持ち続け、かびさせてしまった。選ばれたのは後者であった。何ゆえか？

謎を解いた次郎法師は、直親の申し出を断った。直親に万が一のことがあり、井伊家存続が危うくなった時のため、自らもう一つの饅頭になることを選んだ。日の目を見ぬままかびてしまい、井伊家の犠牲となり得ることを選んだ。

業務継続計画で、誰かが犠牲になる必要はない。いつ起こるかわからぬ災害のために、現在の診療そのものを犠牲にすることもない。先生方の中に、もう一つの饅頭を作っておいていただければそれで良い。既に存在する饅頭はアップデートいただきたい。そして、それが役立つことなく、何十年も先にかびてしまえば、幸いである。

ⁱ Lena H. Sun, Surge in human cases of deadly bird flu is prompting alarm, The Washington Post, March 3 2017

ⁱⁱ 速水 融「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」 藤原書店 2006 年

かなえたい 未来がある。





応援してください。
やまぎんも、私も。

石川 佳純



Yamaguchi
Financial Group



山口銀行
YAMAGUCHI BANK